

慈円と定家の句題和歌考（三）

丸 山 正 道
Masamichi MARUYAMA

（一）

[慈円歌]

黄梢新柳出城牆

春のやどのつゞくかきねを見わたせば梢にさらす青柳の糸（1910）

（新編国歌大観）

[白居易詩]

黄梢新柳出城牆（黄梢の新柳は城牆を出（い）づ。）

（白氏文集歌詩索引）

白居易〔原詩〕は、1157 春至

若為南国春還至。争向東樓口又長。

白片落梅浮澗水。黄梢新柳出城牆。

閑拈蕉葉題詩詠。悶取藤枝引酒嘗。

樂事漸無身漸老。從今始擬負風光。

七言律詩。押韻は、長・牆・嘗・光。

第四句目が、ここの詩句。〔黄梢新柳〕は、柳の新芽を表現したもの。「白氏文集」には、柳の新芽について、

（1）0362の詩に、「波払黄柳梢。（第十一句目）風揺白梅朶。」として、

（2）1161の詩に、「影礁新黄柳。（第五句目）香浮小白蘋。」として、

（3）2326の詩に、「西日龍黄柳。（第九句目）東風蕩白蘋。」として、

（4）2458の詩に、「黄柳影籠随棹月。（第五句目）白蘋香超打頭風」として、

この新芽の柳の表現が、「黄柳梢」、「新黄柳」、「黄柳」、「黄柳」として、その表現が、見られるのである。

「牆」シャウ（漢音）

カキ、マガキ、ツイヂ、邸宅の垣、サカヒ、

〔字源〕垣根のこと。塙にその義をもつ。塙は収め藏する義。牆は邸宅の周圍に繞らして中に邸宅を藏するが如き意也。𠂔（シャウ）は音符。

（『大字典』、編纂者、上田万年、岡田正之、飯島忠夫、栄田猛猪、飯田伝一、講談社発行、大正六年初版、該当頁1445頁）

[慈円歌]

春のやどのつゞくかきねを見わたせば梢にさらす青柳の糸（1910）

〔春のやどの〕歌語。「新古今時代から」（文集百首全釈、31頁）この表現歌あり。

定家歌

土御門内大臣家歌合密有御幸春歌六首中、翠柳誰家、

2140うちなびき春のやどりやこれならんそとの柳ぬしはしらねど

（建仁元年（1210）3月16日、定家40歳の作）（新編国歌大観、第三編、「拾遺愚草」）

が、参考となる。

「梢にさらす」「さらす」の語源的なものは、

「ものを外気や日光・水などに当てて放置し、ついで余分なものを落としつくす意。転じて、人のものを誰の目にもつく所に公開し放置する意。」（該当頁576頁）

（「岩波古語辞典」、大野晋、佐竹昭広、前田金五郎編、岩波書店発行、1974年初版）

例歌としては、慈門歌の、

遠村紅葉

3809見わせば梢にさらす唐錦（からにしき）たが一叢（ひとむら）の里のあたりぞ

（詠百首和歌、建保三（1215）、九、十三、作）（新編国歌大観、第三卷、拾玉集）

が、挙げられる。

一般的には、「錦」に「さらす」例が、用いられている。しかし、ここでは「柳」に「さらす」例なり。

「青柳の糸」歌語。

慈門歌の意とするところは、

春の宿るところの、それに連なっている垣根を、ずっと見渡していると、梢から垂れ下がっている青柳の糸が、何とも言えず、印象に残ることよ。

〔評〕

白居易の「原詩」の面影を残しながら、苦心して詠歌している、と考える。

白居易の「城牆」の雰囲気を出すには、日本と中国との国構えが異なるので、なかなか思うようには出せないのであるが、作者は、苦心の末、「つづくかきねを」と、日本的な様子に置き換えて、表現を生み出しているのである。

〔定家歌〕

黄梢新柳出城牆

410 このさとのむかひの村のかきねより夕日をそむる玉のを柳

（新編国歌大観）

〔このさとのむかひの村の〕

この表現は、「句題からは直接的にこの表現へは導かれない。」（文集百首全釈、31頁）の説あり。

〔玉のを柳〕これは、「美しい柳」の意。（新古今和歌集全評釈、久保田淳著、全9巻、講談社発行、昭和51-52年、第7巻、該当頁470頁）

〔玉のを柳〕これは、「中世歌学では難義の一つであったかもしれない。」（同上470頁）の説、あり。

〔玉のを柳〕参考歌として、一つには、次の西行歌が、挙げられる。

山家柳

52山がつかたをかゝけてしむるいほの さかひにみゆるたまのをやなぎ

（西行全集、久保田淳編、日本古典文学会発行、昭和57年発行、）（52の歌の底本は、山家集陽明文庫本）

随って、西行歌のこの「山がつの」歌においては、「山がつ」と「たまのをやなぎ」との取り合わせ（471頁）が問題となり、俊成は、「たまのをやなぎ」を、「感心しない詞」（470頁）として捉えていた、と見る見方が、一方にはある。

歌の意とするところは、

この里の向かい側にある、村の垣根からあたりをながめていると、今まさに夕日に輝いて、枝々の一つ一つが、その夕日を浴びている、たまのをやなぎよ、カ。

[評]

今まさに夕日を浴びて、そして輝いている、「たまのをやなぎ」と、場所が、寒村である、その村との取り合わせを、定家は、歌として、構築しているのである。定家は、一瞬の閃きを捉えて、それを表現しているのである、と思われる。

「このさとの」歌は、定家の作品では、この歌一首のみ。

(二)

参考までに、「山家」と「柳」、或いは「柳」を題材とした和歌について、その用例に当たってみること、する。西行、慈円、定家の順で。

[西行]

「山家集」歌番号52、53、54、55に、「柳」の和歌が、表現されているのである。

52 山家柳

山がつかたをかゝけてしむるいほのさかひにみゆるたまのをやなぎ

(山家集、この歌番号の作品は、底本は、山家集陽明文庫本)

53 雨中柳

なかなか風のほすにぞみだれける雨にぬれたる青柳の糸

54 柳乱風

見わたせばさほのかはらにくりかけてかぜによらるゝあをやぎのいと

55 水辺柳

みなそこにふかきみどりの色みえて風になみよるかわやなぎかな^(ママ)

随って、あの有名な「道野べの清水ながるゝ柳影しばしとてこそ立とまりつれ」歌が出てくるのは、「西行上人集」である。

それは、「追而加書西行上人和哥次第不同」として、しかも「題不知」として掲載されているのである。(西行全集、409頁参照)

[慈円]

「拾玉集」歌番号207、409、507、606、709、808、1011、1111、1214、1215、1216、1217、1218、1560、1910、2207、2601、3274、4920、5021、

に「柳」が、表現されているのである。(新編国歌大観による)

207 柳

春雨は降りかかれどもみどりなる柳のまゆはみだれざりけり

409 春

かげうつすやなぎのいとをたよりにて浪のあやおるたつた河かな

507 春

たつたがは浪もてあらふ青柳のうちたれがみをけづる春風

606 春

すみわびてあらぬすちにはみだるとも春はわすれじ青柳のいと

709 柳

かすみしく春のかは風うちはへてのどかになびく青柳のいと

808 門前垂柳

わが門をたづねても見よ春のくるしるしの杉は青柳のいと

1011 柳

風ふけばたつたがはらの浪のあやを柳のいとおるところ見れ

1111 春

春をへて身はよそながら青柳のいとふべき世に心みだれぬ

1214 たまやなぎ

たつた河やなぎのまゆをかくをりは水のかがみやたよになるらむ

1215

ましてしばし見にくる人を青柳のいとのもとにはたえずとどめん

1216

山ざとのそとのほかの玉柳よそのしるしと成ぬべきかな

1217

なにとなくみる心こそむすほるれ柳の糸をみだす春風

1218

君が世のためしにひかむ青やぎのいとはいずれの春かたゆべき

1560 春

すみよしの春の柳の青みどり松なき庭のけしきなりけり

1910 黄梢新柳出城牆

春のやどのつづくかきねを見わたせば梢にさらす青柳の糸

2207 河

春の雨にみどりのいとを染めかくるたつ田がはらの玉のを柳

2601 春

蒼姫のやなぎのまゆにいとそめて花のあやおる比は来にけり

3274 河辺古柳

ながむればたつたがはらのふしやなぎなれも老木の春ぞかなしき

4920 春

霞たつ朝日にはるる春雨の露にいとぬく玉のを柳

5021 述懐

のどかなる柳のいとにぬく玉のみだれぬ程の雨のゆふ暮

[定家]

「拾遺愚草」歌番号111、408、508、1309、1510、1733、1968、1984、2013、2140、2141、2142、2747

「拾遺愚草具外」歌番号108、256、410、677

に「柳」が、表現されているのである。(新編国歌大観による)

111 春

青柳のかづらき山の花ざかり雲に錦をたちぞかさぬる

408 春

おそくときみどりのいとしるきかな春くるかたの岸の青柳

- 508 春
植ゑおきし昔を人に見せがほにはるかになびく青柳の糸
- 1309 春
あおによしならの都の玉柳色にもしるく春はきにけり
- 1510 春 水辺古柳
とし月もうつりにけりな柳かげ水行く川のすゑの世の春
- 1733
道のべにたれうゑおきてふりにけん残れる柳春は忘れず
- 1968 春
あさみどり玉ぬきみだる青柳の枝もとををに春雨ぞふる
- 1984 正月柳
うちなびき春くるかぜの色なれや日をへてそむる青柳のいと
- 2013 岸柳
おそくときいづれの色に契るらん花まつ比の岸の青柳
- 2140 翠柳誰家
うちなびき春のやどりやこれならんそとの柳ぬしはしらねど
- 2141 内裏歌合せに、水辺柳
春の日に岸の青柳うちなびきながきよちぎる滝の白糸
- 2142 同題、家会
染めかくるはなだの糸の玉柳下ゆく水も光そへつつ
- 2747 野外柳
みちのべの野原の柳したもえぬあはれ歎の煙くらべに
「拾遺愚草貝外」
- 108 春
こきまづるにしきおれとや青柳のはなだのいとをまづは染むらん
- 256 春
りちのうたにことのねあへる夕まぐれかたいとなびく庭の青柳
- 410 春 黄梢新柳出城牆
このさとのむかひの村のかきねより夕日をそむる玉のを柳
- 677 春
なびけどもさそひもはてぬ春風にみだれてまさる青柳のいと

以上が、西行、慈円、定家の「柳」に関する用例歌である。

(三)

定家の「堀河院題百首」に、こんな端書きがある。

養和百首披露之後猶可詠堀河院題之由有嚴訓(、)仍寿永元年又詠此歌(、)今見之一首無可採用之歌(、)仍漏弃了(、)而倩案之(、)當初詠出此歌時(、)父母忽落感涙將來可長此道之由被放返抄(、)隆信朝臣寂蓮等面々吐賞翫之詞(、)右大臣殿故有稱美御消息(、)俊恵來拭饗應之涙(、)時之人望以之爲始(、)依思此往事(、)更書加此興(、)殊有緒面之思(284-285頁)

(藤原定家歌集、佐々木信綱校訂、岩波文庫、1931年初版)

* 何故、「堀河院題百首」に関して、「新編国歌大観」からの引用ではなく、「藤原定家歌集」からかとしたのは、「新編国歌大観」には、百題百首の「題略之」(840頁)として、題を記していないからである。

* (、) 印は、筆者が記す。

大凡の意は、次の如きか。

定家が「初学百首」を詠歌したのが、養和の年。それに次ぐ百首歌が、この「堀河院題」百首である。この百首歌は、父・俊成から「厳訓」があり、詠んだものである。今この「百首歌」を見ると、一首たりとも「無可采用之歌」と。よって、「漏棄」てしまった、と。しかしながら、此の歌を「詠出」したとき、定家の両親は、「感涙」を落としてしまった。そして、「将来(、)可長此道之由」返答が、定家の許に届けられたのである。隆信、寂蓮等は、「賞翫」の言葉を「吐」かれた。又、藤原兼実は、「称美御消息」を定家に差し上げた。又、俊恵は、「饗応之涙」を「拭」われた。思うに、「時之人望」は、「以之爲始」と言われている程である。「思此往事」うと、このことを「書加此奥」えて、おくこととする。しかしながら、殊の外「有緒面之思」と。

次に、「百首歌」の名称について、当たってみることとする。

[慈門]の場合、

(1)「初度十題百首」、(2)「述懐百首」、(3)「堀河院題百首」、(4)「取集百首」、(5)「日吉百首」、(6)「御裳濯川百首」、(7)「厭離百首」、(8)「草率露瞻百首」、(9)「句題百首」、(10)「一日百首」、(11)「宇治山百首」、(12)「勅句百首」、(13)「賦百字百首」、(14)「花月百首」、(15)「座百首」、(16)「十題百首」、(17)「住吉百首」、(18)「歌合百首(六百番歌合)」、(19)「北山樵客百首」、(20)「文集百首」、(21)「日吉百首」、(22)「二十五首題百首」、(23)「賀茂百首」、(24)「八幡法華經法文百首」、(25)「春日百首」、(26)「春日百首草」、(27)「難波百首」、(28)「送佐州百首」、(29)「百首 四季雜各廿首」、(30)「秀歌百首」、(31)「厭離欣求百首」、(32)「句題百首」、(33)「略秘贈答百首」、(34)「古今歌百首 千五百番歌合」、(35)「詠百首」、(36)「百首 神主康業」、(37)「百首 代能季卿詠之内大臣家」

* 参考文献 (1) 慈門詠歌年譜、石川一著、上戸学園女子短期大学紀要第11号、昭和56年、(2) 慈門和歌論考、石川一著、笠間書院、平成10年、(3) 拾玉集(上)、和歌文学大系58 久保田淳監修 石川一、山本一著、明治書院、平成20年

[定家]の場合

(拾遺愚草)の場合

(1)「初学百首」、(2)「二見浦百首 円位上人」、(3)「大輔百首」、(4)「閑居百首」、(5)「早率百首 第一度」、(6)「早率百首 第二度」、(7)「花月百首」、(8)「十題百首」、(9)「歌合百首」、(10)「院百首 初度」、(11)「院千五百番百首」、(12)「内大臣家百首 建保三年」、(13)「内裏百首 名所」、(14)「院百首 建保四年」、(15)「関白左大臣家百首 貞永元年」、(16)「韻歌百二十八首 建久七年秋」、(拾遺愚草員外雑歌)の場合

(1)「一字百首 建久元年六月」、(2)「一句百首 建久元年六月」、(3)「文集百首 建保六年」、(4)「四季題百首 承久二年秋」、(5)「堀河院題百首」

* 参考文献 (1) 藤原定家歌集、佐々木信綱校訂、岩波文庫、1931年初版、(2) 訳注 藤原定家全歌集(上・下)、久保田淳著、河出書房新社、昭和60年初版、(3) 藤原定家とその時代、久保田淳著、岩波書店、1994年初版

「堀河院題百首」は、元々「堀河院百首」があつて、それを基として、「百題百首」、を以て、詠歌されたものである。それは、次の如し。

〔堀河院百首〕

春

立春 (1)、子日 (2)、霞 (3)、鶯 (4)、若菜 (5)、残雪 (6)、梅 (7)、柳 (8)、早蕨 (9)、桜 (10)、春雨 (11)、春駒 (12)、帰雁 (13)、喚子鳥 (14)、苗代 (15)、堇菜 (16)、杜若 (17)、藤花 (18)、款冬 (19)、三月尽 (20)、

夏

更衣 (1)、卯花 (2)、葵 (3)、郭公 (4)、菖蒲 (5)、早苗 (6)、照射 (7)、五月雨 (8)、廬橋 (9)、螢 (10)、蚊遣火 (11)、蓮 (12)、氷室 (13)、泉 (14)、荒和菰 (15)、

秋

立秋 (1)、七夕 (2)、萩 (3)、女郎花 (4)、薄 (5)、苧萱 (6)、蘭 (7)、萩 (8)、雁 (9)、鹿 (10)、露 (11)、霧 (12)、槿花 (13)、駒迎 (14)、月 (15)、櫛衣 (16)、虫 (17)、菊 (18)、紅葉 (19)、九月尽 (20)、

冬

初冬 (1)、時雨 (2)、霜 (3)、霰 (4)、雪 (5)、寒廬 (6)、千鳥 (7)、氷 (8)、水鳥 (9)、網代 (10)、神楽 (11)、鷹狩 (12)、炭竈 (13)、埋火 (14)、除夜 (15)、

恋

初恋 (1)、不被知人恋 (2)、不遇恋 (3)、初遇恋 (4)、後朝 (5)、遇不遇恋 (6)、旅恋 (7)、思 (8)、片思 (9)、恨 (10)、

雑

暁 (1)、松 (2)、竹 (3)、苔 (4)、鶴 (5)、山 (6)、河 (7)、野 (8)、関 (9)、橋 (10)、海路 (11)、旅 (12)、別 (13)、山家 (14)、田家 (15)、懷旧 (16)、夢 (17)、無常 (18)、述懷 (19)、祝 (20)、

*参考文献 歌合・定数歌全釈叢書五「堀河院百首全釈」(上、下2冊揃)、滝澤貞夫著、風間書房発行、2004年初版

この「堀河院百首」は、「康和二年(1100)四月二十八日」「以後、間もない頃」(「堀河院百首全釈」下、423頁)成立の作品である。作者は、源俊賴である。(同、423頁)それを、「応製百首」としてまとめられたのが、源国信である。(和歌文学辞典、おうふう、有吉保編、昭和57年初版、577-578頁)それは、長治二年(1105)5月29日-長治三年(1106)3月11日の間のことで、時の堀河天皇に奏覧されたと推定されている。(同、578頁)

慈円、定家の時代、この「堀河院題百首」を詠みこなすことが、和歌登竜門の一つとされていたのである。

定家は、定家自身二番目の百首歌として、この「堀河院題百首」を詠歌している。定家21歳(寿永元年(1182))の時である。一方慈円は、慈円自身三番目の百首歌として、この「堀河院題百首」を詠歌している。慈円28歳(寿永元年(1182))の時か、とされている百首歌である。

テキスト

- 1、白氏文集歌詩索引 下冊(全3冊の内の1冊)(底本は、那波本)、平岡武夫、今井清 編著、同朋舎出版、1989年初版
- 2、拾玉集(新編国歌大観)(底本は、吉蓮院蔵本)、角川書店、昭和60年初版
- 3、拾遺愚草(新編国歌大観)(底本は、書陵部蔵本)、角川書店、昭和60年初版
- 4、拾遺愚草員外(新編国歌大観)(底本は、書陵部蔵本)、角川書店、昭和60年初版

参考文献

- 1、白氏長慶集（底本は、明の萬曆中馬元調校本）、長沢規矩也編、汲古書院、昭和49年初版
- 2、「白氏文集」の解釈本について、
「白氏文集」(一・二・三・四・五・六・七・八・九・十・十一・十二・十三)
新釈漢文大系、岡村繁編著、明治書院発行。このうち、2009年現在発行されているのは、(二上・二下・三・四・五・六・七上・八・九)
- 3、文集百首全釈(歌合・定数歌全釈叢書八)、文集百首研究会著、風間書房、2007年初版
- 4、六家集、拾玉(七卷本)(和本)、國學院大學図書館蔵、武田祐吉博士旧蔵本（911. 147 / 6 / (3) (4) (5) (6) (7)
- 5、拾玉集(上)、(和歌文学大系58)、久保田淳監修、石川一、山本一、著、明治書院発行、平成20年初版
- 6、藤原定家歌集、佐々木信綱校訂、岩波文庫、1931年初版
- 7、訳注 藤原定家全歌集(上下2冊揃)、久保田淳著、河出書房新社発行、昭和61年初版
- 8、白氏文集歌詩索引 上冊、中冊、下冊(全3冊)(底本は、那波本)、平岡武夫、今井清 編著、同朋舎出版、1989年発行初版
- 9、歌合・定数歌全釈叢書五「堀河院百首全釈」(上、下2冊揃)、滝澤貞夫著、風間書房発行、2004年初版
- 10、藤原定家とその時代、久保田淳著、岩波書店、1994年初版
- 11、慈門詠歌年譜、石川一著、上戸学園女子短期大学紀要第11号、昭和56年
- 12、慈門和歌論考、石川一著、笠間書院、平成10年初版
- 13、西行全集、久保田淳編、日本古典文学会発行、昭和57年初版
- 14、新古今和歌集全評釈(全九巻)、久保田淳著、講談社発行、昭和51、52年初版
- 15、新編国歌大観、第三巻(私家集編I)、角川書店発行、昭和60年初版